

信仰と幸福感の関係 - 日本、コスタリカ・オランダ三カ国比較調査

著者	湯川 洋久
雑誌名	宮崎学園短期大学紀要
号	10
ページ	223-230
発行年	2018
URL	http://id.nii.ac.jp/1106/00000689/

信仰と幸福感の関係

—日本、コスタリカ・オランダ三カ国比較調査—

湯川 洋久

The Relationship between Religiosity and Happiness/Life satisfaction -Comparative Research among Japan, Costa Rica, and Netherland-

Hirohisa YUKAWA

I. 問題の所在

本稿は、信仰心と幸福感の関連について、幸福概念の多義性に着目して幸福か否かの質問を多義的に問うことを通じ、日本・オランダ・コスタリカと、国民性・文化や幸福度の程度について大きく異なるとされる三カ国について比較調査することで、信仰心と幸福度の現れ方がどのように異なるか検証することを目的とするものである。なお本稿は、日本心理学会第 81 回大会公募シンポジウム SS-094 (2017 年 9 月 21 日・久留米) において発表したものに加筆修正を加えたものである。

一般に、信仰心がある方が幸福度は高いとされる (多数論文あり。レビュー論文としては、Koenig, McCullough, and Larson (2001) など)。

最近の研究は、単に信仰心が高ければ幸福度が高いとする単純な関係のみならず、幸福概念の多義性、国際比較の必要性などの理由から幸福概念をさらに分類した上で、さらに詳細に分析している。例えば Uchida, Takahashi & Kawahara 2013 は、幸福の内容を *eudaimonic happiness* (人生を生きる意味に基づく幸福感) と *hedonic happiness* (快不快の感覚に基づく幸福感) に分類した上で東北大震災前後のそれぞれの幸福感を比較し、震災被害に遭った人々のことを思いやった人たちの *hedonic happiness* は低下したが、*eudaimonic happiness* はかえって上昇したと実証した。また、Snoep 2008 は、米国、オランダ、デンマークの三カ国比較調査を行い、宗教を持つこと (*religiosity*) と幸福感 (*Happiness*) の関係は、弱いものの順相関の関係があり、米国が三カ国の中で最も強い関係があると実証した。日本一カ国に関して宗教と幸福度の関係を初めて論じた調査としては、*Japanese General Social Surveys (JGSS) 2000-2003* と *2005* を用いた Roemer 2010 の論文がある。もっとも、Roemer 2010 は、*JGSS* データを用いたもので半構造化面接方式ではないなどの理由から、宗教と幸福度の多義的な内容を示せたものではない。

しかるに、これまでの研究では、一般に幸福度の低いとされるアジアの日本、反対に幸福度の高いとされる欧州先進国オランダと米州途上国コスタリカについて比較しながら、信仰と幸福感の関係を多義的に調査した研究は、私の知る限り見当たらない。

日本・コスタリカ・オランダは、それぞれ地域・国民性・文化や幸福度の程度について大きく異なるとされそれぞれ特徴を有するため、比較調査することによって、信仰と幸福度の関係は多様な様相を示すことが明らかになると考えられる。

そこで本研究においては、信仰心と幸福感の関連について、幸福概念の多義性に着目し、幸福か否かについての質問において「幸福感（現在）」「理想の幸福感」「幸福感（5年後）」「人生満足度」「最高・最悪の人生」に分けて質問し、日本・コスタリカ・オランダ、と国民性・文化や幸福度の程度について大きく異なるとされ、それぞれ特徴を有する三カ国について比較調査した。

World Happiness Report 2017によると、オランダは6位、コスタリカは12位、日本は51位である。

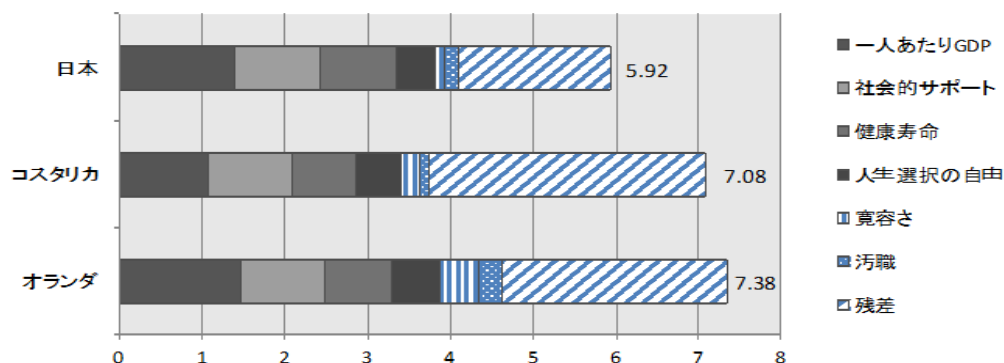


図1 各国の現況（高橋報告より抜粋）

II. 調査の概要

1. 調査方法

調査方法としては、層化無作為抽出、半構造化面接方式によった。即ち、回答対象者は無作為に抽出され、また回答方式には、選択肢がありそれらのどれかを選ぶ質問形式と、どう思うか自由に回答してもらう質問形式とを併用した。対象者一人当たり面接時間は20分を想定、但し実際には1時間を越える場合も多かった。

	対象	抽出方法	地域数	対象地点数	回答者数	平均年齢	調査手法
日本	全国20歳-	選挙人名簿	13地域	51	160	54.9	面接
コスタリカ	全国18歳-	エリアサンプリング	7県	25	100	46.4	面接
オランダ	全国18歳-	電話帳	12州	18	46	60.6	面接

表1 調査方法（高橋報告より抜粋）

2. 調査項目

(1) 被説明変数

(a)被説明変数としては、幸福度を5種類の聞き方で質問した。

・幸福感（現在）(Happiness)

「現在あなたは幸福ですか？」

・理想の幸福感 (Ideal Happiness)

「一般的に言って、人はどの程度幸福であるべきと考えますか？」

この質問については、人は完全に幸福であるべきと考える場合には10、完全に不幸であると考

える場合には 0、幸福と不幸と半々と考える場合には 5、というように質問した。

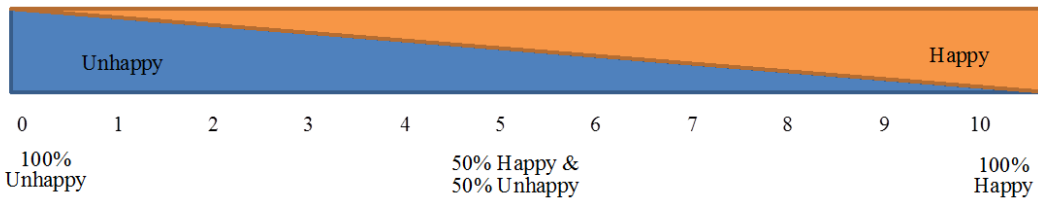


図2 サーベイに掲載されたスケールの説明

- ・ 幸福感（5年後）（Happiness five years later）

「現在の幸福度を 0 とし、5 年後の幸福度はどう変化していると思いますか？」

- ・ 人生満足度（Life Satisfaction）

「あなたは自分の人生に満足していますか？」

- ・ 最良・最悪の人生（Cantril's Ladder）

「最良の人生を 10、最悪の人生を 0 とし、あなたは今のあたりだと考えますか？」

(b) 「幸福感（現在）」「理想の幸福感」「人生満足度」「最高・最悪の人生」については、（0 から 10 までのスケール）で質問した。即ち、例えば「幸福感（現在）」を例にとるならば、「現在あなたは幸福ですか？もっとも幸福と感じるならば 10、もっとも不幸と感じるならば 0、とし、それらの間を 0 から 10 の数字で回答ください」と質問する形式とした（スケールを図示し、0 から 10 までの整数を一行に並べ回答者が選びやすいようにした）。

「幸福感（5年後）」については、現在の幸福度を 0 とし、5 年後の幸福度の変化を（0±5）のスケールで質問した。

(2) その他の項目

- ・ 改訂版楽観性尺度（the Revised Life Orientation Test, LOT-R）
- ・ 協調的幸福感尺度（Interdependent Happiness Scale, IHS）
- ・ 宗教心（信仰する宗教の有無、信心深さ、宗教的こころの大切さ）

You are…

- 1 very religious （大変真剣に宗教を信じている）
- 2 somewhat religious （ある程度宗教を信じている）
- 3 not religious much （さほど宗教を信じていない）
- 4 not religious at all （宗教を全く信じていない）

(3) 個人属性

- ・ 性別、年齢、学歴、職業、世帯人数、婚姻関係、健康自己評価、世帯収入、耐久財所有など。

III. 分析

1. 図表による分析

(1)

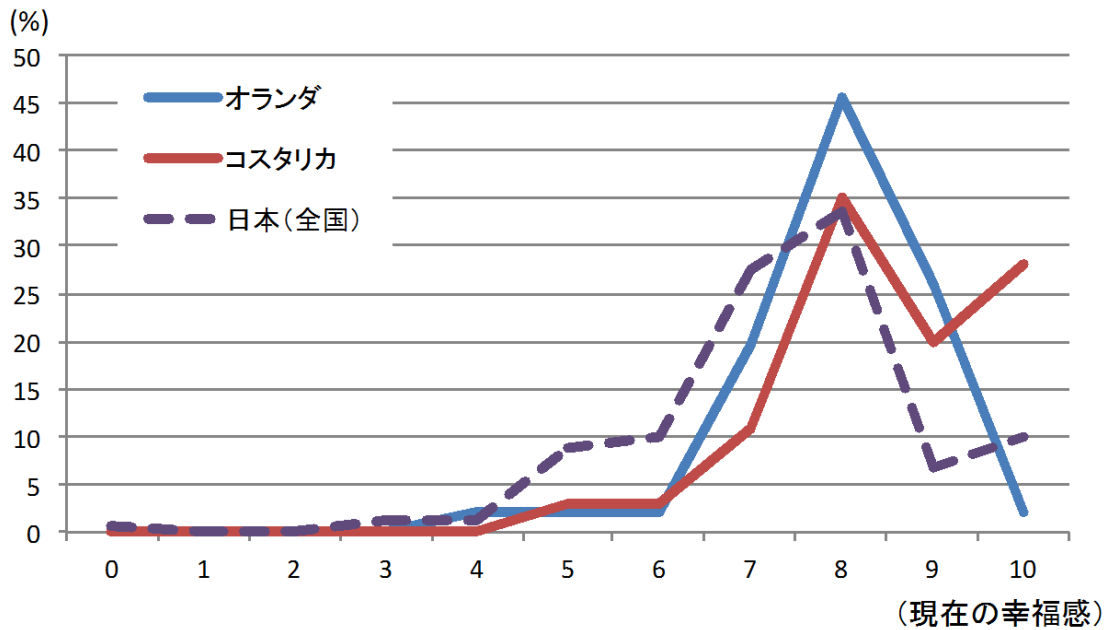


図3 現在の幸福感 (高橋報告より抜粋)

この図3で、オランダの平均は、7.91、コスタリカの平均は 8.50、日本の平均は 7.37 である。

(2)

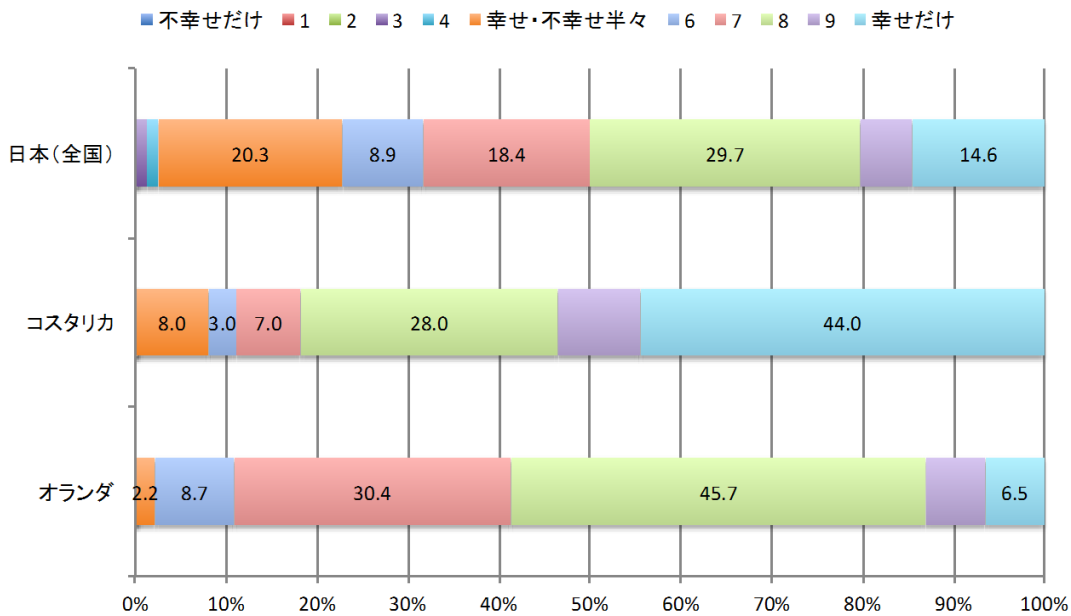


図4 理想の幸福感

この図4で、日本は、スケール8 (黄緑色) が 29.7%、幸せ・不幸せ半々 (橙色) が 20.3%、幸せだけ (水色) が 14.6%の順である。コスタリカの場合、幸せだけ (水色) が 44.0%、スケール8 が 28.0%、幸せ・不幸せ半々が 8.0%の順である。オランダの場合、スケール8 が 45.7%、

幸せ・不幸せ半々が 30.4%、幸せだけは 6.5%である。

(3)

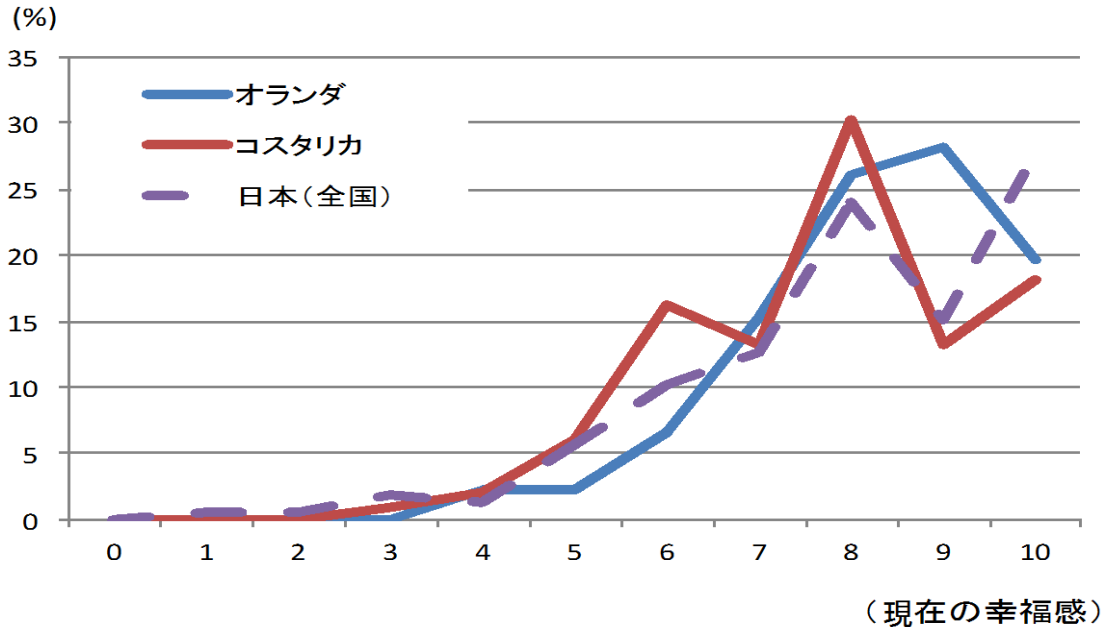


図5 理想の幸福感とのギャップを勘案した現在の幸福感 (高橋報告より抜粋)

2. 回帰式

- ・スケール 0~10 の値を連続数と仮定し回帰分析を行った。
- ・但し、幸福感についてはほとんどの人が 5 以上の数であったため (図 1 参照)、対数をとって被説明変数とするモデルも試みた。

3. 分析ソフト

分析ソフトには STATA を用いた。

IV. 本稿における仮説

信仰を持つ人の幸福度の現れ方は、単に信仰を持たない人より幸福というだけではなく、国民性・文化の違いその他により異なる現れ方をする。

さらに、性別効果：女性の方が信仰心ある人が多い、年齢効果：年齢が高いほど信仰心ある人が多い、というのが一般的であることから、これら 2つの要因も考慮したうえで分析する。

V. 分析結果

1. コスタリカデータの回帰分析結果

(1) 最高・最悪人生について、信仰心あるほど高得点 (5%有意) との結果が出た。即ち、信仰心が強いと、自分にとって可能な最高の人生に関して、よりベストに近いと考えているということである。解析結果は以下の通りである。

logBestWst~W	Coef.	Std. Err.	t	P> t	[95% Conf. Interval]	
Religious	-.0425907	.0203264	-2.10	0.039	-.0829278	-.0022536

表2 コスタリカ・データの解析結果（信仰心）

（2）最高・最悪人生について、性別を考慮したケースでは、男性の方が高得点（10%有意）との結果が出た。

これは即ち、同じ信仰心レベルでは、男性の方が自分にとって可能な最高の人生に関して、よりベストに近いと考えているということである。解析結果は以下の通りである。

logBestWst~W	Coef.	Std. Err.	t	P> t	[95% Conf. Interval]	
Religious	-.0380973	.0196735	-1.94	0.056	-.0771439	.0009492
gender	.1094485	.0380458	2.88	0.005	.0339381	.1849588

表3 コスタリカ・データの解析結果（性別を考慮したケース）

2. オランダデータの回帰分析結果

人生満足度について、信仰心がある方が高得点（10%有意）となった。即ちこれは、信仰心があるほど人生満足度が高いという結果である。これは通説のように、信仰心があるほど幸福度が高いとの結果に沿い、同時に生活満足度も高くなるというものである。解析結果は以下の通りである。

logSatisfied	Coef.	Std. Err.	t	P> t	[95% Conf. Interval]	
Religious	-.030875	.0169908	-1.82	0.077	-.0651886	.0034386

表4 オランダ・データの解析結果（信仰心）

3. 日本データの回帰分析結果

日本のデータについて、有意になった被説明変数と説明変数の組み合わせはなかった。

VI. 結果の解釈

結論としては、国によって信仰心がある人の幸福感の内容が異なるという仮説は、以上の解析の結果から一部有意となり、一部実証されたと言える。

1. コスタリカ

自分にとって可能な最高の人生に関して、信仰心がある人はよりベストに近いと考えている。これは、信仰心がある人の方が、自分にとって可能な最高の人生を、現実を見据えてある程度低く見積もって現状を受け入れているという解釈が可能である。

このことは、信仰心のあることが、不必要に現状を嘆くのではなく、困難な現状も（神様から

の思し召しとして) 受け入れ、場合によっては積極的に受け入れて幸福感を上げていると解釈できよう。

男性の方がこの点について幸福度が高いのは、女性の方が信仰者であっても実は「もっとよりよい人生があるのでは」と考えているからという解釈が可能である。というのも、一般にコスタリカで多数派であるカソリックでは、現代先進国より多少男尊女卑内容の教義であることが多いとされるからである。例えば聖書では、奴隷制や一夫多妻制が描かれており、また女性は男性の所有物の意味合いがあったことが描かれている。聖書時代の時代背景と現代との背景の違いを考慮せずに文字通りの解釈をする教会だと、女性の立場は低いこととなり、そのような解釈をする教会に行き、外の世界を知っている現代女性なら、現状より良い幸福があると考えするのも無理もないことであろう。

2. オランダ

信仰心がある方が人生満足度が高いということは、信仰心があれば幸福という通説の一具現化であると言えよう。しかしながら、他の要素、例えば幸福感について有意にならなかったということは、他はさほどでもない、ということなのだろうか。更なる研究を要する。

VII. 今後の課題

信仰心の内容についてさらに詳細に分析した上で比較すれば、各国どのような信仰内容であれば、どのような幸福度がより高いか、などさらに判明するであろう。

今回の調査ではサンプル数が多くなかったこともあり多重回帰分析は不可能であったため、相関関係を検証するにとどまったが、サンプル数が増えれば、より詳細な結果が得られよう。

コスタリカについては信仰者間でも性別によって幸福度に差があるという結果が得られたということは、コスタリカにおけるカソリックの教義内容をさらに精査し、より男女平等な教義のカソリック国(ないしはよりリベラル(=男女平等)なプロテスタント国)と比較し、女性の幸福度にどう影響するかのリサーチ可能ではないだろうか。

従ってまた、更なる調査によって詳細が明らかになれば、教義内容の改定にも影響を及ぼすことが可能であろう。

謝辞

本研究は、(公益財団法人)トヨタ財団 2014 年度研究助成プログラム「「理想の幸福」を用いた幸福概念の多様性に関する研究：人々の声に耳を傾ける聞き取り調査を通じて」で実施した研究成果(D14-R-0637, 研究代表者:高橋義明 筑波大学准教授(肩書は助成開始時点)の一部である。コスタリカ調査を可能とした Prof. Mariano Rojas (Universidad Popular Autónoma del Estado de Puebla), Prof. Juan Rafael Vargas (University of Costa Rica)、オランダ調査を行うことを可能とした Prof. Ruut Veenhoven (Erasmus Universiteit Rotterdam)、Pauline van Tol (Vrije Universiteit Amsterdam) に謝辞を表す。

参考文献

Koenig, H.G., McCullough, M.E., & Larson, D.B. *Handbook of religion and health* (2001) Oxford University Press.

Roemer, M.K., “Religion and Subjective Well-Being in Japan” *Review of Religious Research* (2010) Vol. 51(4): pp.411-427

Snoep, L., “Religiousness and Happiness in Three Nations: A Research Note” *Journal of Happiness Studies* (2008) 9:207-211

Uchida, Y., Takahashi, Y., & Kawahara, K., “Changes in Hedonic and Eudaimonic Well-Being After a Severe Nationwide Disaster: The Case of the Great East Japan Earthquake”, *Journal of Happiness Studies* (2013), 15(1): pp.207-221

高橋義明「幸福概念の多様性—日本・オランダ・コスタリカ3カ国調査を通じて—」、日本心理学会第81回大会公募シンポジウム SS-094(2017年9月21日久留米にて開催)発表レジュメ